小学校の音楽教育の実態に関する調査研究（Ⅰ）

－山口県内の小学校教員を対象に－

十川真弓・星原忠雄・末廣正巳・野波健彦・西村順子・池上　敏・片山順子

A Survey on the present State of Music Education at Elementary Schools (I)

－ A Questionnaire Survey of Elementary School Teachers in Yamaguchi Prefecture －

by

Mayumi SOGAWA, Tadao HOSHIHARA, Masami SUEHIRO, Takehiko NONAMI

Jyunko NISHIMURA, Satoshi IKEGAMI, Jyunko KATAYAMA

[Abstract]

Music education at elementary schools plays a very important role after infant education. For whether children can maintain their interests in music throughout their lives depends on music education in this period. However, the present music education at this level in Japan has lots of problem about content, method, teacher's qualifications and so on. In order to solve these problems, first of all, it is necessary for university music teachers who are involved in music and methodology in music education to grasp the present state of music education and to make a research into teacher－training in music education. Especially, it is essential to grasp what kind of image teachers have on music education at elementary schools.

We conducted a questionnaire survey of 810 elementary school teachers in Yamaguchi prefecture regarding the present state of music education at elementary schools. In this thesis, we have tried to analyze the results of the questionnaire and to add some considerations to the obtained data for our future reference.

Ⅰ　は　じ　め　に

小学校段階の音楽教育は、子供たちが音楽文化とのよい関わりを生涯持ち続けられるかどうかという点で、幼時教育段階に続いて非常に重要な役割を持っていると言える。しかし、わが国の小学校の音楽教育は、授業の内容、方法、担当する教員の資質等多くの問題を抱えている。音楽教育の研究誌である季刊音楽教育研究は、1974年第 1号で「教わる側の発言」と題して音楽教育についての子どもたちの作文を特集した。千成は、その特集の中の「わたしの音楽の先生」に寄せた子どもたちの発言を、

同誌の別号での教員養成に関連した論述の中で、次のように要約している。「……音楽科の授業が嫌いにならぬためには、子どもたちはどのような教師に習いたいと願っているか。……それは、端的に言って次のような条件を満たしている先生である。音楽をいやいや教えない、音楽の力量が豊かである、子どもたちをえこひいきしたりわけへだてることをしない、ユーモアに富んでいる、きびしくかつやさしい先生、以上に尽きる。…」[1]

前述の子どもらの発言が十数年前のものとはいえ、千成の言う「音楽をいやいや教えない先生」、「音楽の力量が豊かである先生」、の養成の問題は教員養成に関わっている者にとって今日なお重要な課題である。これらの問題は、すべて現場の教員のみに責任があるのではなく、過去においても現在においても小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムが充分検討されたものでないことにも起因している。さらに言えば、教員免許法の規定する単位数が充分なものでないことにも起因しており、教員養成に関連して長年言われてきたことである。これらのことについては、季刊音楽教育研究が、1976年第 7号で「音楽科教員養成課程」、1979年第20号で「小学校教員養成課程」、1981年第29号で「音楽科教員養成課程の問題と展望」と題して特集してきたし、日本教育大学協会全国音楽部門大学部会でもたびたびテーマとして取り上げ論議してきた。小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムについては、これまでに各地の大学の特色ある実践が報告され、また個人の授業実践についても学会等で発表されてきた。しかし、それらはいずれも各大学の実状をふまえての多様なカリキュラムであり、一般化されたわが国の小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムとは言えない。そこで、山口大学でも実状をふまえた独自のカリキュラムの開発が必要となる。教員免許法については、このたびその施行令の一部が改正され、小学校教諭の免許状を受けるためには音楽の専門科目に関して現行の「音楽・図画工作及び体育に関する科目のうち2以上についてそれぞれ2単位以上必要」から、「音楽・図画工作・体育についてそれぞれ2単位以上必要」になり、平成2年度入学生から適用されることになっている。[2] これによって、今までは音楽の専門科目を全く履修しない場合でも教材研究の単位さえ修得すれば免許状が受けられたが、改正案では、音楽専門の単位が2単位以上必修になったことは一応評価されよう。しかし、それでもなお小学校教員養成課程に入学してくる学生の中には高校で音楽を選択しない者がいることも考えると、改正された2単位以上修得したとしてもこれらの学生が教員になった場合、果して大切な入門期の音楽の授業を担当できるかどうか正直言って疑問である。この点も前述の音楽科のカリキュラムの問題と同様これまでに論議され尽くしてきたことがらである。この辺の事情から、常に音楽専科の問題が話題になってきたのであるが教員定数との絡みもありすべての学校に音楽専科を期待することは今後も無理であろう。一方、全人教育の立場から考えると必ずしも専科がよいというわけでもなく、積極的な意味から小学校の低・中学年はむしろ学級担任が音楽の授業を行う方がよいという考え方もある。吉田は、音楽教育と教師の研修について論じている中で、学級担任が音楽の授業をすることについて、「…したがって学級担任教師の中には、音楽的知識・技能の不足を、児童との人間的接触の深さや指導法の工夫によって補い、音楽科に堪能な教師に伍してむしろよりすぐれた教育効果をあげている例も少なくない。」と述べている。[3] そこで、小学校の音楽の授業は学級担任と専科が協力して行うという前提のもとに、山口大学としても限られた単位数の中で最大限の指導効果をあげる努力が必要となる。

これらの問題解決には、先ずさしあたって小学校課程の音楽専門並びに教材研究の授業に関わっている者が、小学校の音楽教育の実態を把握し、小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムを検討していくことが今後必要である。特に、小学校の教員が、音楽教育に対してどのような意識を持っているかを知ることは重要である。

われわれは山口県内の小学校教員 810名を対象として、小学校における音楽教育の実態と音楽教育に対する教員の意識について調査を行った。本稿は、それらの調査結果について分析し、若干の考察を加えて小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムを展望しようとするものである。

Ⅱ 研 究 の 目 的

本研究は、小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムを検討する第1段階として、小学校における音楽教育の実態と音楽教育に対する教員の意識を明らかにすることにある。そのために、山口県内の小学校の教員に音楽教育の実態と音楽教育に対する教員の意識に関する質問紙調査を行い、その結果について分析し考察を行う。

Ⅲ 研 究 の 方 法

本研究では、小学校における音楽教育の実態と音楽教育に対する教員の意識を明らかにするために、研究方法として質問紙による調査方法を選択した。

調査票の作成に当たっては、関連する先行研究[4) 5)] を参考にしながら質問項目を検討し、一方現場の音楽出身の校長や教員並びに山口県教育委員会の音楽担当指導主事等にも調査全般に関して意見を求めた。最終的に調査票は、1.小学校における音楽の授業に関することがら、2.小学校の教員の音楽経験に関することがら、という大項目のもとに、それぞれ下位項目を設けたものになった。それは、末尾に添付した15項目の質問からなる調査票である。

調査対象としては、山口県内の教員（管理職、特殊学級担任・養護教諭を含む）を考えたが、その選定に当たっては、今回の調査が全面的に山口県小学校教育研究会（小教研）音楽部会の協力のもとに行われた関係で、県内を29地区に分けた小教研の地区割によった。従って、調査対象は、岩国、玖北、玖西、玖南、柳井、大島、熊毛、徳山、下松、光、新南陽、熊北、都濃、山口、防府、佐波、吉敷、美祢郡、阿東、宇部、小野田、美祢、厚狭、下関、豊浦、萩、長門、大津、阿西の山口県全域にわたる29地区の小学校並びに山口大学教育学部付属小学校2校の教員である。

調査票の配布は、平成元年6月に行われた小教研音楽部会に出席の各地区の理事に依頼した。同年7月中旬までに県内29地区から、結果的には約 120校 810名の教員から回答が返送され、回収することができた。ただし、各地区の理事の判断の違いから調査票の配布された校数には各地区で差があり、1地区 1校の地区から 1地区1.5校の地区までであった。

Ⅳ 結 果 と 考 察

今回の調査は前記のような配布・回収方法をとったため、回収率は極めて高率であった。しかし、そのために調査対象者に対して多少なりとも精神的な圧力がかかりそのため回答内容に影響しているかもしれないこと、かなりの部分について記入漏れのある調査票が相当数あり、それらを有効回答として扱うかどうか、等の問題点については度々論じられ、集計方針や執筆の観点をめぐって活発な意見交換が行われた。

結局、この度は「すべての回答をひとまず有効回答として扱う。記入漏れ、記入なしは必要と思われる箇所では集計するが、原則として集計数には含めない。」という方針で集計し、その数値にもとづき考察を行うことにした。以下の考察全体はその上での意見交換・討議を重ねた結果得られた七名全員の共通認識にもとづくものである。

前段では、今回集計した各項目についてその結果を掲げ数値をもとに簡単な分析を行う。

Q1、先生ご自身についてうかがいます。

（男・女）　　（20代・30代・40代・50代以上）

今年度の所属についてうかがいます。

1　学級担任（　　）学年

2　専科、教科（　　）

音楽専科の先生方にうかがいます。

出身大学は次のどれでしょうか。

イ　教育学部・教育大学系　　ロ　音楽学部・音楽大学系

ハ　音楽大学などの教育学科　　ニ　その他（　　）

Q1に対する回答により調査対象者 810人の内訳を集計した結果は図1-1,2,3,4のとおりである。

図1－1 先生ご自身についてうかがいます
（年齢・性別）

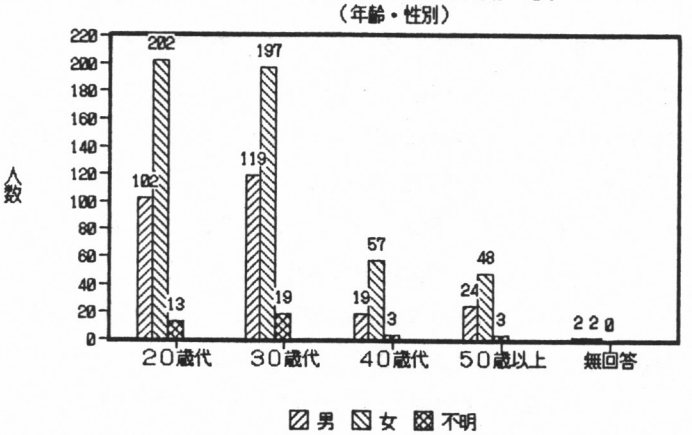


図1－2今年度の所属

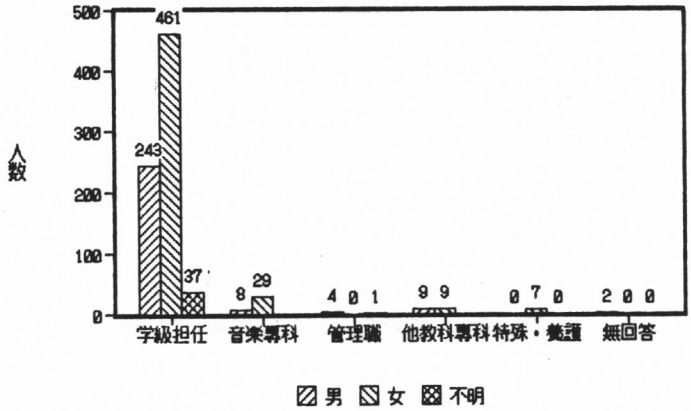


図1－3音楽専科の先生方の出身大学

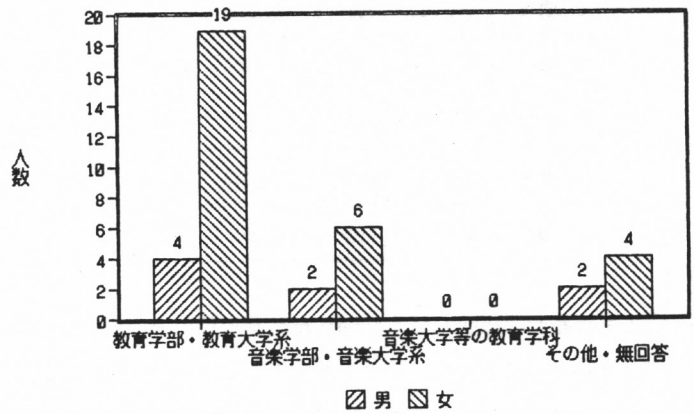
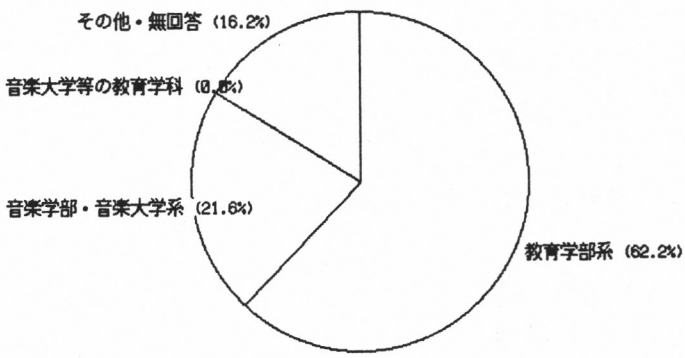


図1－4音楽専科の先生方の出身大学



ここで性別または年代の記入漏れが少なからず見られたことは少々意外に思われたが、ともに不明というものは皆無であった。

学級担任は普通学級（複式学級を含む）のみを集計対象とし、極く一部の特殊学級・養護学級等の学級担任は除いてある。音楽専科は、音楽のみの専科だけでなく、他の教科と音楽とを専科として担当する教員、主任等と音楽の授業を兼務する教員、すなわち学級担任ではないが普通学級の音楽の授業を担当している教員も集計対象として含んでいる。

回答者層は年代的には20代・30代のいわゆる若手・中堅教員が全体の約8割、女性が男性の約2倍、学級担任が全体の約9割という結果であった。今年度の山口県の小学校教員全体の年齢別構成は表1（山口県教職員録平成元年度版による）であるので、二つを比較すると男性の回答率、高年齢層の回答率が低いことがわかる。この理由についてはいくつか考えられるが、後出の質問項目のいくつかの集計結果と併せて考察したい。

表1　平成元年度 山口県小学校教員男女別・年齢別構成

	男	%	女	%	合計	%
２０歳代	608	38.6	967	61.4	1575	28.1
３０歳代	737	35.8	1321	64.2	2058	36.7
４０歳代	223	37.4	374	62.6	597	10.6
５０歳代	936	67.7	447	32.3	1383	24.6
合　計	2504	44.6	3109	55.4	5613	100

音楽専科の出身大学等を尋ねたのは少しでも詳細な音楽歴把握の上に立っての考察をしたかったからであるが全体の傾向は推察できるものの、論考を進めていくには絶対数に不足を感じるという印象は否定できない。今後の展開如何によっては音楽専科に対しての悉皆調査が必要となるかもしれない。

この度の調査は、「大学の小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムの検討資料として、小学校における音楽教育の実態と音楽教育に対する教員の意識を知りたい」という所から出発しているので、以下は小学校教育の中核をなす学級担任の回答を集計した数値を中心に、音楽専科の回答を集計した数値とを並べて考察を進めていきたい。

Q2からQ4までは「現在音楽の授業とどう関わっているか」、「どのような感想を持っているか」、「過去においてはどうであったか」等を尋ねた。

Q2、現在、音楽の授業を担当しておられますか。

イ　自分のクラスを担当している。

ロ　自分のクラスと他のクラスを担当している。

ハ　専科教員として担当している。

ニ　担当していない。

回答の集計結果は図２－1,2のとおりである。

図2－1 現在、音楽の授業を担当しておられますか。（学級担任のみ）

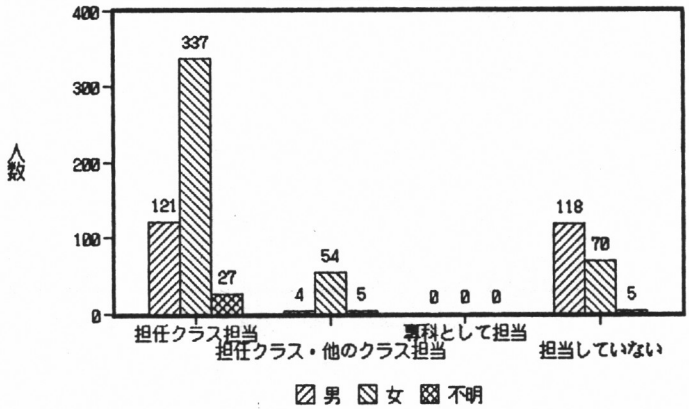
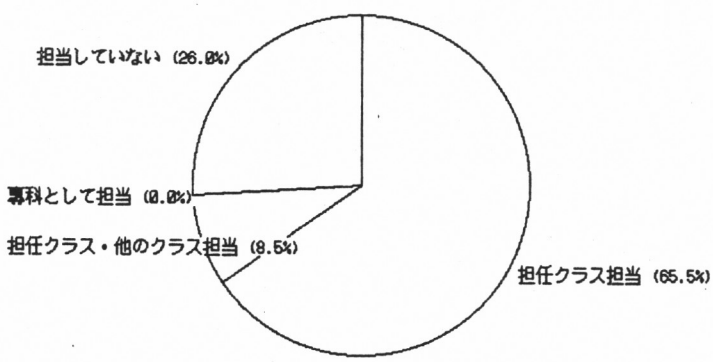


図2－2 現在、音楽の授業を担当しておられますか。（学級担任のみ）



この質問に対しては学級担任全員が回答を寄せている。ここでは男性教員の「ニ担当していない」の回答数がその５割弱という数値が目を引く。

Q3、前問Q2で「イ（自分のクラス）」、「ロ（自分のクラスと他のクラス）」と答えられた先生方にうかがいます。音楽の授業を担当することについてどのような感じを持たれていますか。

イ　喜んで（楽しんで）担当している。

ロ　いやいやながら（仕方なく）担当している。

ハ　特に何とも思わない。

ニ　その他（　　）

選ばれた理由について簡潔にお書き下さい。

集計結果は図３－1,2,3のとおりである。

図3－1音楽の授業についての感想
（学級担任）

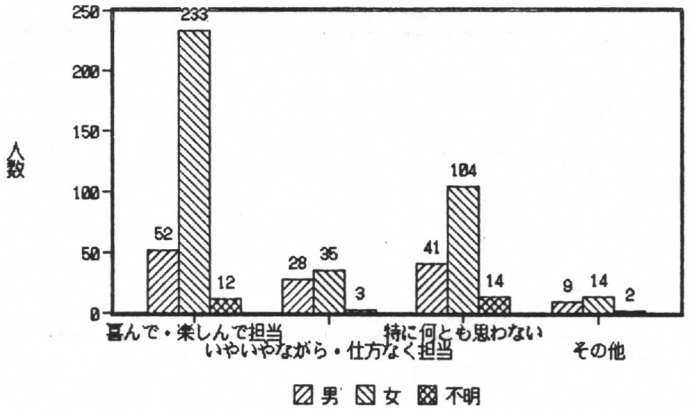


図3－2音楽の授業についての感想
男（学級担任）

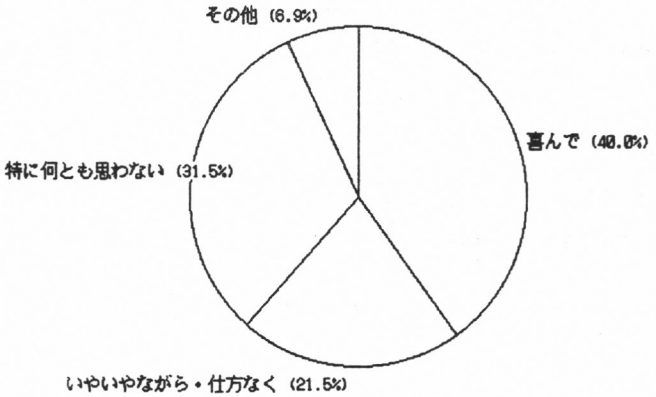
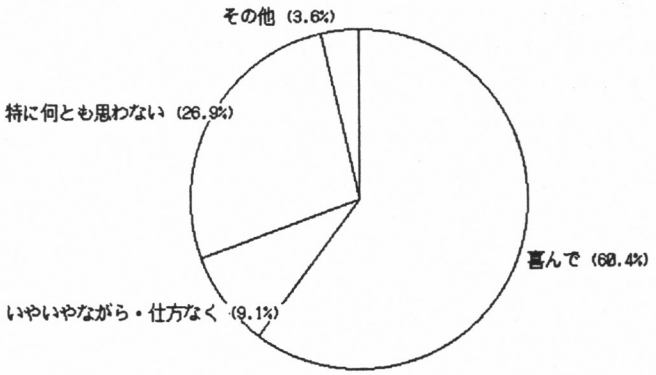


図3－3音楽の授業についての感想
女（学級担任）



ここでは、少々意地悪く「喜んで（楽しんで）」の対極的表現として「いやいやながら（仕方なく）」というマイナス・イメージの強い選択肢を設定したことや、「ニュアンスの違い」といった細かい所まで気を配った選択肢を設定しなかったことなどの理由から回答に多少の記入上の混乱、躊躇が見られた。いくつか例を挙げると、「このような回答を設定される時には表現に充分配慮されたい」というメッセージがついているもの（回答の記入なし）、回答の二つ以上に○印を付しさらに注記を書き加えたり一つに○印を付しその一部を抹消する等して少しでも自分の感じ方に近いものを書いておこうとしているように思われるもの、この箇所のみ回答の記入がないもの、等である。確かに人間の感情は極めて多様でありとても分類などできる代物ではないが、だからこそ「ニその他」を設けてその微妙なニュアンスまで含めた複雑な心境を書いて欲しかったのだが、それが充分活かされなかったのは残念である。前述のような状況のため、Q2のイとロの合計とQ3の数値とは一致していない。

今回は選択理由の集計を見送ったが、「イ（喜んで、楽しんで）」に対しては「自分も音楽が好きだから」、「音楽を喜んでやっている子供達を見ることは楽しいから」などの、「ロ（いやいやながら、仕方なく）」に対しては「ピアノの演奏能力が充分でなく、伴奏がうまく弾けないから」、「発声や歌唱をどう指導したらうまく行くのか良くわからない」などの、「ハ（特に何とも・・・）」に対しては「小学校の教員は全教科を担当するのが当然だから」などの理由が多かった。

このQ3の理由については、後日さらに詳しい考察を行いたい。なお、相当数に理由の記入がなかった。

Q4、前問Q2で、「ニ（担当していない）」と答えられた先生方にうかがいます。

a　担当していない理由をお答え下さい。

イ　音楽専科の先生にお願いできるので。

ロ　音楽の授業ができないから。

ハ　他の教科（　　）の専科教員だから。

集計結果は図4－1,2,3のとおりである。

図4－1 音楽の授業を担当していない理由
（学級担任のみ）

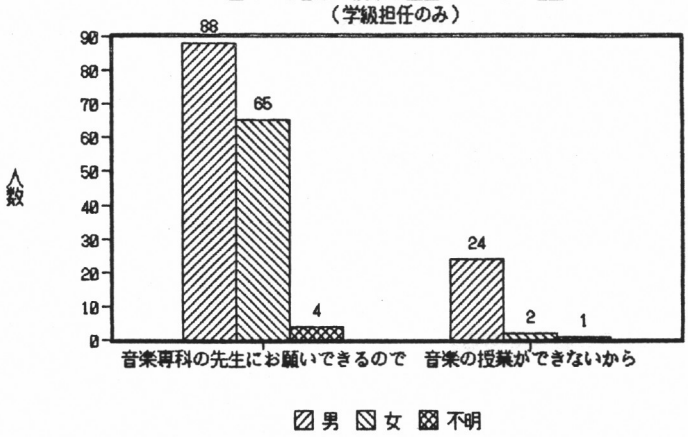


図4－2音楽の授業を担当していない理由
男（学級担任）

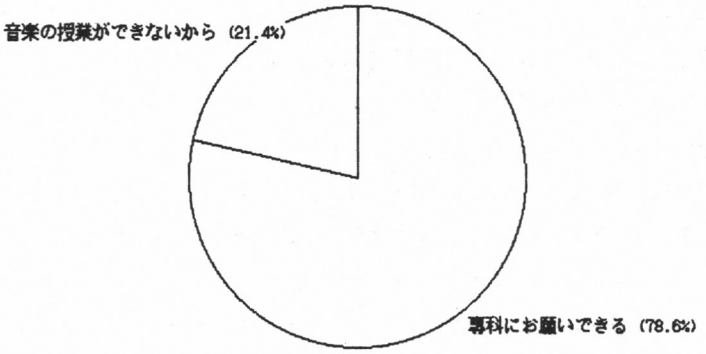


図4－3音楽の授業を担当していない理由
女（学級担任）

図4－1,2,3は学級担任のみを集計したものなので、当然ながら「ハ」は0であった。また、ここでも若干の記入なしが見られた。ここでは「ロ音楽の授業ができないから」と答えた男性教員の数が多いことが目を引く。回答を寄せた男性の学級担任の総数が 243名であったので、その約1割が自分では「音楽の授業ができない」と感じていることになる。これは「ロ」を理由に挙げた女性教員の同性の学級担任教員全体に対しての比率（ 0.4％）と比較すると極めて高率と言わねばならないだろう。

b　今年度以外についてうかがいます。
　音楽の授業を担当されたことがありますか。
イ　ある
ロ　ない

集計結果は図5－1,2,3のとおりである。

図5－1今年度以外に音楽の授業を担当されましたか。（学級担任のみ）

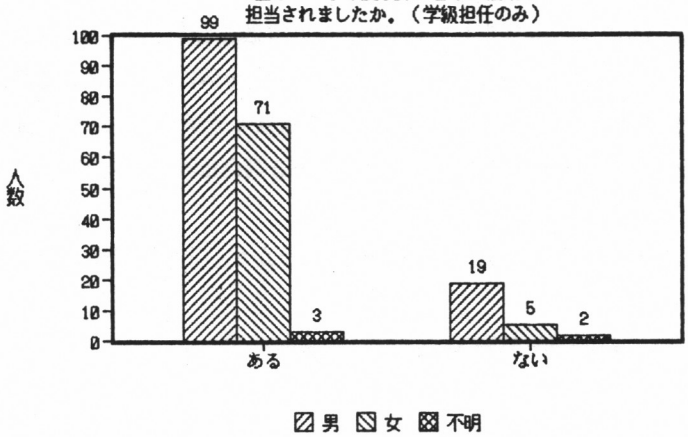


図5－2今年度以外に音楽の授業を担当されましたか。男（学級担任）

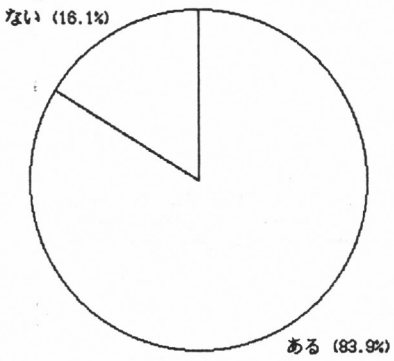
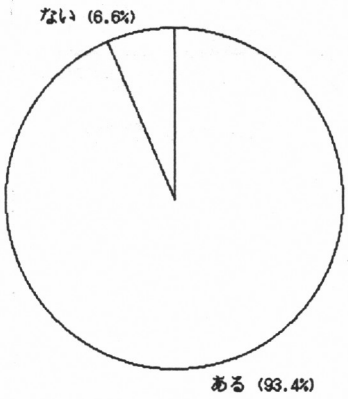


図5－3今年度以外に音楽の授業を担当されましたか。女（学級担任）



ここでは、Q4全体がQ2で「今年度は音楽の授業を担当していない」と答えた学級担任へのものであったにもかかわらず、今年度も過年度も音楽の授業を担当している学級担任の相当数がここにも○印を付しているため、Q2での「ニ担当していない」の回答数を若干上回っている。

ここでも「ロない」と答えた男性教員の数、同性の学級担任全体に対して占める割合、ともに女性教員のものに比して高い数値を示している。調査時点まで音楽の授業をまったく担当したことのない学級担任は回答総数26、回答を寄せた学級担任全体に占める割合は約 3.5％であった。

c　前問bで、「イ（ある）」と答えられた先生方にうかがいます。音楽の授業を担当された時の感想をお聞かせ下さい。

イ　喜んで（楽しんで）担当していた。

ロ　いやいやながら（仕方なく）担当していた。

ハ　特に何とも思わなかった。

ニ　その他

選ばれた理由について簡潔にお書き下さい。

集計結果は図6－1,2,3のとおりである。

図6－1 音楽の授業についての感想
（以前担当したことのある学級担任）

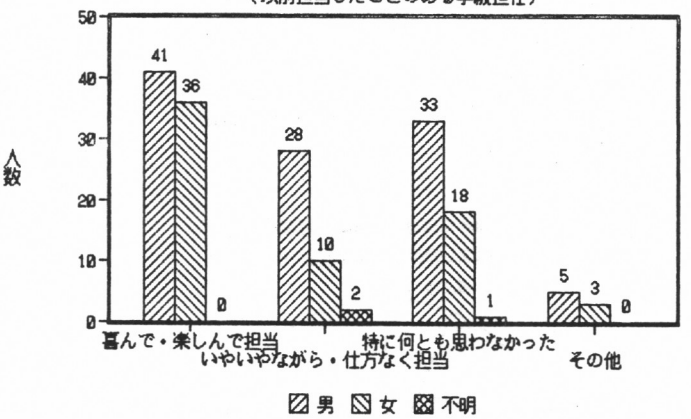


図6－2音楽の授業についての感想
男（以前担当したことのある学級担任）

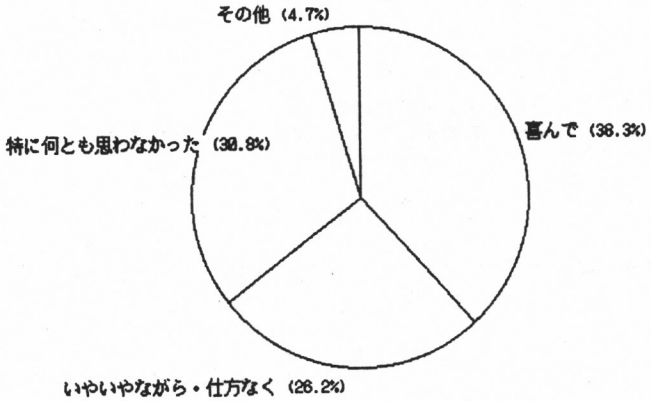
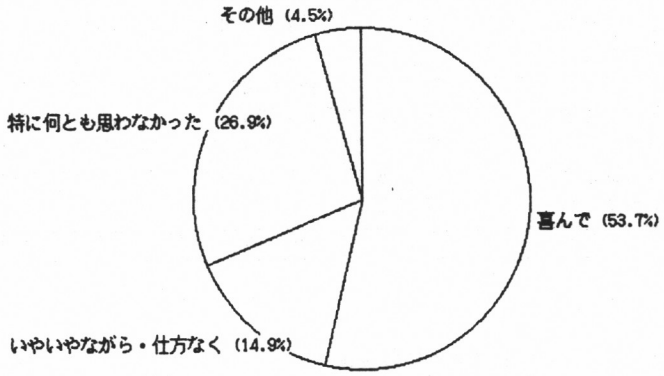


図6－3音楽の授業についての感想
女（以前担当したことのある学級担任）



ここではQ3（今年度音楽の授業を担当している教員の感想）と比較してみると、「ロいやいやながら・仕方なく」、「ハ特に何とも思わなかった」というマイナス・イメージ、または消極的イメージの比率が若干高くなっていることが指摘できよう。これは男女ともに同じ傾向を示している。

Q3とQ4全体の数値から、全般に男性教員の方が音楽が不得手であるという傾向が見えるが、ここではひとまずそのことを指摘するにとどめ、後ほど他の集計結果と併せて考察することにしたい。

Q5、Q6、Q7は音楽の授業の位置付けとそれに関わる質問である。

<u>すべての先生方にうかがいます。</u>

Q5、小学校における教科としての音楽科の重要度について、どのような感じを持たれていますか。低・中・高学年のそれぞれについてお答え下さい。

	非常に重要	重要	少しは重要	重要でない
低学年				
中学年				
高学年				

集計結果は表２－1,2,図７－1,2,3,4,5,6のとおりである。表２－1,図７－1,2,3が学級担任、表２－2,図７－4,5,6が音楽専科のものである。

表２－１【５】に対する学級担任の回答
教科としての音楽科の重要度について、どのようにお感じですか。
低・中・高学年についてそれぞれお答え下さい。

		男		女		不明		全体	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
低学年	非常に重要	152	66.7	308	68.9	18	52.9	478	67.4
	重要	69	30.3	132	29.5	15	44.1	216	30.5
	少しは重要	4	1.8	5	1.1	1	2.9	10	1.4
	重要でない	3	1.3	2	0.4	0	0	5	0.7
	小　計	228	100	447	100	34	100	709	100
中学年	非常に重要	90	38.1	133	30.6	4	13.3	227	32.4
	重要	133	56.4	289	66.4	24	80	446	63.6
	少しは重要	10	4.2	13	3.0	2	6.7	25	3.6
	重要でない	3	1.2	0	0	0	0	3	0.4
	小　計	236	100	435	100	30	100	701	100
高学年	非常に重要	91	38.7	125	29.1	4	12.5	220	31.6
	重要	119	50.6	277	64.4	22	68.8	418	60.0
	少しは重要	19	8.1	28	6.5	6	18.8	53	7.6
	重要でない	6	2.6	0	0	0	0	6	0.7
	小　計	235	100	430	100	32	100	697	100

表２－２【５】に対する音楽専科の回答
教科としての音楽科の重要度について、どのようにお感じですか。
低・中・高学年についてそれぞれお答え下さい。

		男		女		不明		全体	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
低学年	非常に重要	4	50	24	82.8			28	75.7
	重要	4	50	5	17.2			9	24.3
	少しは重要								
	重要でない								
	小　計	8	100	29	100			37	100
中学年	非常に重要	3	37.5	13	44.8			16	43.2
	重要	5	62.5	15	51.7			20	54.1
	少しは重要			1	3.4			1	2.7
	重要でない								
	小　計	8	100	29	100			37	100
高学年	非常に重要	3	37.5	10	34.5			13	35.1
	重要	5	62.5	17	58.6			22	59.5
	少しは重要			2	6.9			2	5.4
	重要でない								
	小　計	8	100	29	100			37	100

図7－1低学年の，教科としての音楽科の
重要度について（学級担任）

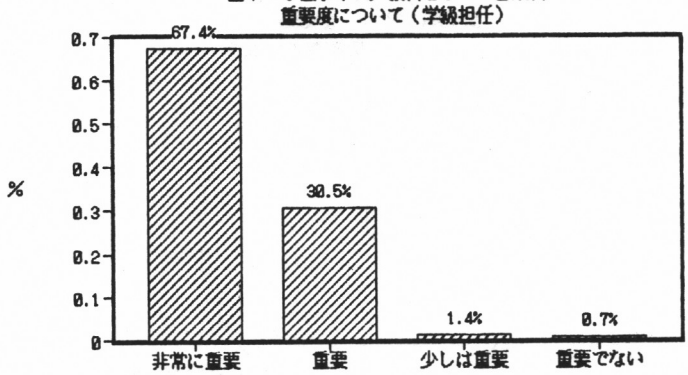


図7－2中学年の教科としての音楽科の
重要度について（学級担任）

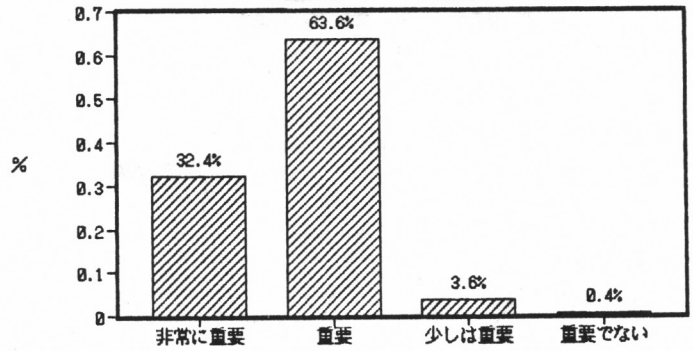


図7－3高学年の，教科としての音楽科の
重要度について（学級担任）

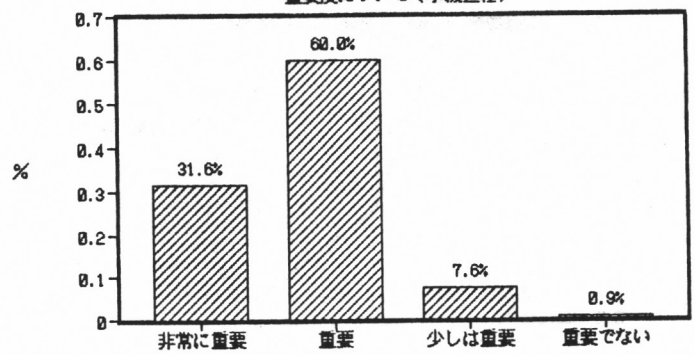


図7－4低学年の，教科としての音楽科の
重要度について（音楽専科）

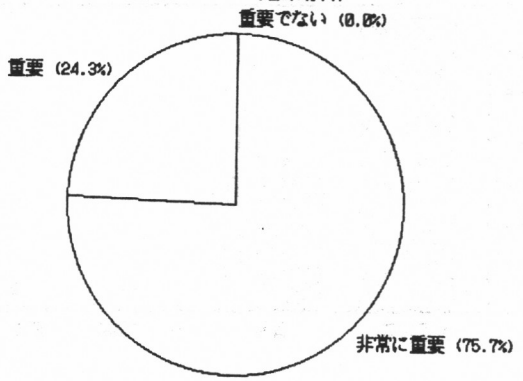


図7－5中学年の，教科としての音楽科の
重要度について（音楽専科）

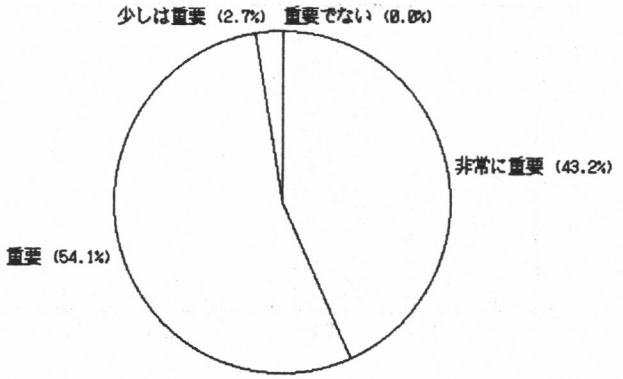
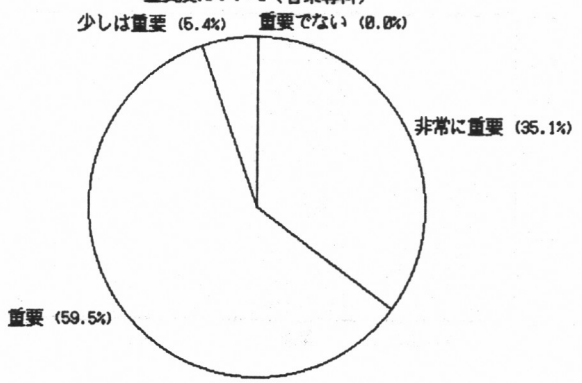


図7－6高学年の，教科としての音楽科の
重要度について（音楽専科）



ここでは、現在担当しているあるいは過年度に担当したことのある学年のみに限って○印を付したものが相当数あった。また、このQ5以降は比較のため学級担任と音楽専科とを集計した。全体的な傾向としては低学年から高学年に行くに従って重要度が漸減しているが、これは程度の差はあるにしても両者共通に見られた。しかし、否定的な「重要でない」を選択したのは前者で若干名にとどまり、後者では皆無であった。殆どすべての教員が「音楽は教科として重要」との認識を持っていると言ってよいだろう。注目に値するのは学級担任の男性教員の重要度認識では中・高学年において女性教員のものを上回わった数値を示していることであろう。

Q6、小学校音楽科の授業はどのような点に重きを置くべきだとお考えになりますか。
上位３位までを数字でご記入下さい。

(　　) イ　発声法・楽器の演奏法などの技術習得。
(　　) ロ　音楽をすることによる明るく楽しい学級作り。
(　　) ハ　音楽についての知識を広めさせ、理解を深めさせること。
(　　) ニ　歌・楽器演奏など、上達しようと一生懸命頑張る気持ちを育てること。
(　　) ホ　こう歌いたい、こう演奏したい、と自分で考える活動を多く取り入れること。
(　　) ヘ　子供どうしの助け合い、話し合いの場面を持たせ、お互いに励まし合ったり高め合う活動を行うこと。
(　　) ト　幅広く音楽に触れさせ、豊かな音楽的感性を育てること。
(　　) チ　すべての音楽活動を通して音楽を愛好する心を育てること。
(　　) リ　その他（　　）

集計結果は表３－1,2のとおりである。

表３－１【６】に対する学級担任の回答
音楽科の授業はどのような点に重きを置くべきでしょうか。（上位３位まで記入）

		男		女		不明		全体		総計
		人数	*	人数	*	人数	*	人数	*	
発声法・楽器の演奏などの技術習得	1	6	7	5	10	1	2	12	19	180
	2	22		29		3		54		
	3	39		53		3		95		
音楽することによる明るく楽しい学級作り	1	80	19	172	23	12	3	264	45	490
	2	24		53		3		80		
	3	34		61		6		101		
音楽についての知識を広めさせ、理解を深めさせる	1	3	2	3	7	1	2	7	11	76
	2	9		13		0		22		
	3	17		19		0		36		
歌・楽器演奏など、上達しようと頑張る気持ちの育成	1	10	3	9	13	0	1	19	17	254
	2	39		75		4		118		
	3	29		65		6		100		
こう歌いたい、演奏したいと自分で考える活動を多く	1	1	6	5	1	0	0	6	7	114
	2	18		28		5		51		
	3	16		33		1		50		

子供どうし助け合い、話し合いの場面をもたせ、お互いに励まし合ったり、高め合う活動	1 2 3	11 22 18	4	7 44 76	8	0 3 5	0	18 69 99	12	198
幅広く音楽に触れさせ、豊かな音楽的感性を育成	1 2 3	54 41 34	16	106 115 67	18	10 12 4	3	170 168 105	37	480
すべての音楽活動を通して、音楽を愛好する心を育成	1 2 3	52 33 24	15	101 78 67	16	6 7 5	3	159 118 96	34	407
その他										

＊印の欄の数値は、上位３位を記入するかわりに、○印をつけて回答された先生の数
総計の欄の数値は、上位３位までの回答数と○印による回答数の総計

表３－２【６】に対する音楽専科の回答
音楽科の授業はどのような点に重きを置くべきでしょうか。（上位３位まで記入）

		男		女		不明		全体		総計
		人数	＊	人数	＊	人数	＊	人数	＊	
発声法・楽器の演奏などの技術習得	1 2 3			3 3	1			3 3	1	7
音楽することによる明るく楽しい学級作り	1 2 3	4		4 3 3	2			8 3 3	2	16
音楽についての知識を広めさせ、理解を深めさせる	1 2 3			1 2	1			1 2	1	4
歌・楽器演奏など、上達しようと頑張る気持ちの育成	1 2 3	1		1 4 4	2			1 5 4	2	12
こう歌いたい、演奏したいと自分で考える活動を多く	1 2 3	2 3		3 1 2				3 3 5		11
子供どうし助け合い、話し合いの場面をもたせ、お互いに励まし合ったり、高め合う活動	1 2 3	1 2		1 1 3	3			1 2 5	3	11
幅広く音楽に触れさせ、豊かな音楽的感性を育成	1 2 3	2 2 2		7 5 3	4			9 7 5	4	25
すべての音楽活動を通して、音楽を愛好する心を育成	1 2 3	2 2 1		7 6 3	3			9 8 4	3	24
その他										

＊印の欄の数値は、上位３位を記入するかわりに、○印をつけて回答された先生の数
合計の欄の数値は、上位３位までの回答数と○印による回答数の総計

ここでは数字によって記入せず、重要と思われるもの三つに○印を付したもの、二つ以下に○印を付したもの、記入なし等が相当数あったために、合計数は該当教員数の3倍にはなっていない。ただし、4位以下の数値まで記入したもの、四つ以上に○印を付したものは見あたらなかった。また、順位と人数を勘案した数値化を検討したが、今回は見送った。「リその他」に極く僅かな記入があったが今回は考察からはずしてある。

ここでは、音楽教育の重要な二つの側面、「音楽そのものを教える」のか、「音楽の授業をとうして何かを教える」のか、どちらの傾向に主眼を置いた選択がなされるかが知りたかった訳であるが、結果は極めて興味深いものとなった。すなわち、順位・○印を付した人数を単純に合計すると、上位三つは学級担任、音楽専科ともに同じものになっているが、合計数の比較による順位ではかなりの違いが見られる。学級担任がどちらかと言えば「学級経営上の重要な一部分」として音楽の授業を把えているのに対して、音楽専科はやはり「音楽それ自体」、「音楽そのものの価値」を教えることに関心が強いように思われる。

Q7、小学校音楽科の授業は誰が担当すべきだとお考えになりますか。

イ　学級担任

ロ　専科教員

ハ　児童の発達段階（学年）によって違ってくると思う。

ニ　同一学年間での担当授業をやりくりしてでも得意な先生がやるべき。

ホ　その他（　　）

選ばれた理由を簡潔にお書き下さい。

集計結果は図8－1,2,3,4のとおりである。

図8－1音楽科の授業は誰が担当すべきだとお考えですか。（学級担任）

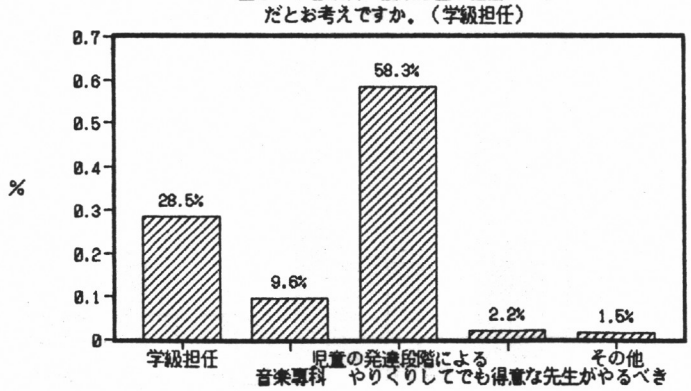


図8－2音楽科の授業は誰が担当すべきだとお考えですか。（学級担任）

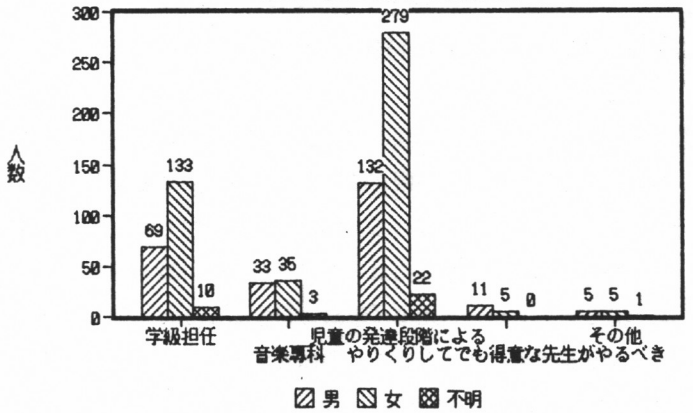


図8－3音楽科の授業は誰が担当すべきだとお考えですか。（音楽専科）

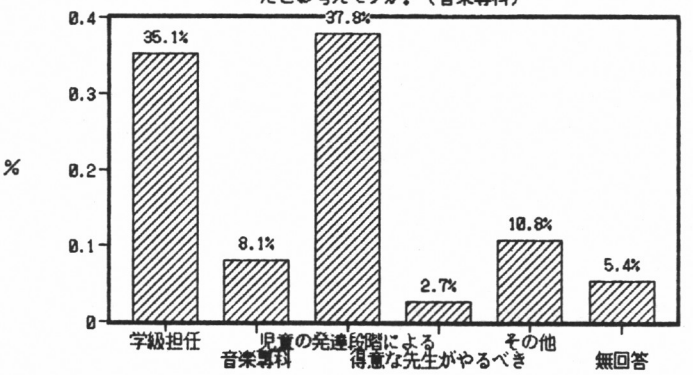
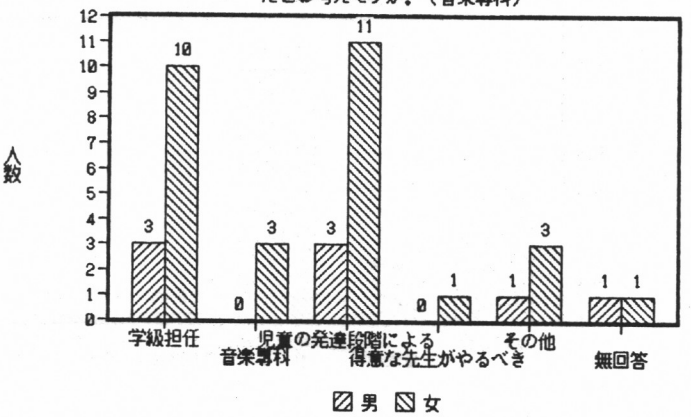


図8－4音楽科の授業は誰が担当すべきだとお考えですか。（音楽専科）



ここでも若干の記入なしと二つ以上の項目にわたり○印を付したものが見られた。この設問に対しては極めて多くの理由・説明・具体例の記入が見られた。これは先程の二つ以上の項目に対して○印を付したものも含めて、類型化された回答では自分の考えていること、感じていることなどを的確に伝えることはできないと判断し、理由その他を併記した教員が多かったためと推察される。同時に「理想と現実、どちらを優先すべきか」、「建前と本音、どちらを書くべきか」等で迷ったこともうかがわせる。これは書かれた理由等を読んでみると、必ずしも○印を付した回答と一致していないものがかなりの数にのぼること、「ハ児童の発達段階によって違ってくる」の具体的な例や意見を記入したものが多かったことによる判断であるが、この点についてより正確ではっきりした状況を把握するためにはさらに一歩踏み込んで、Q7の理由の集計が不可欠であろう。大まかな状況については後半で触れることにする。

次のQ8以下Q11までは音楽体験を中心に尋ねた。これはどのような音楽歴を持って教壇に立つことになったのか、その概要を知りたかったからである。

先生方ご自身の音楽経験についてうかがいます。

Q8、高校時代、音楽を選択されましたか。

イ　選択した。

ロ　選択しなかった。

集計結果は図9－1,2,3,4のとおりである。

図9－1高校時代。芸術科として音楽を選択されましたか。（学級担任のみ）

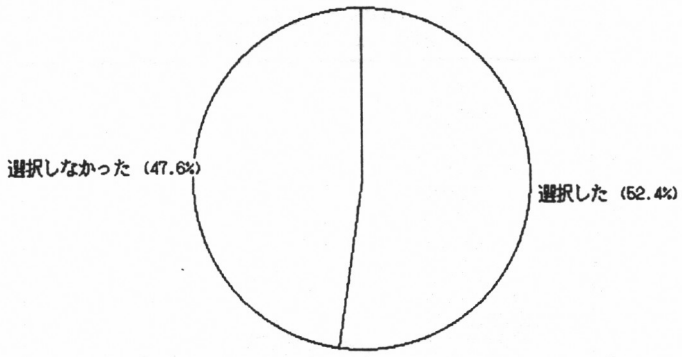


図9－2高校時代。芸術科として音楽を
選択されましたか。（学級担任のみ）

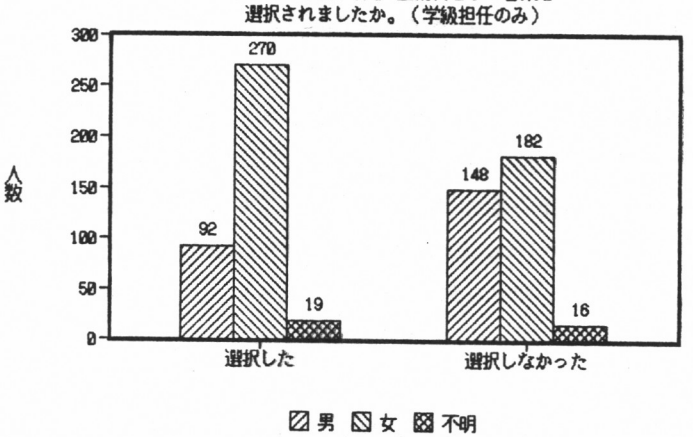


図9－3高校時代。芸術科として音楽を
選択されましたか。（音楽専科）

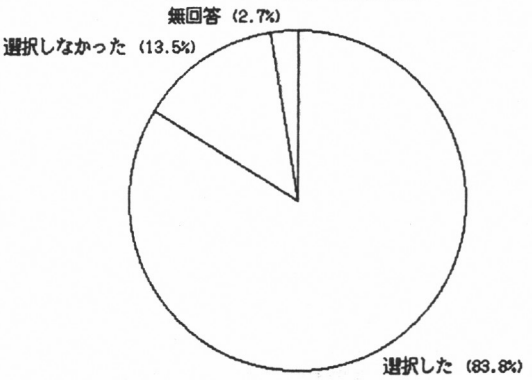
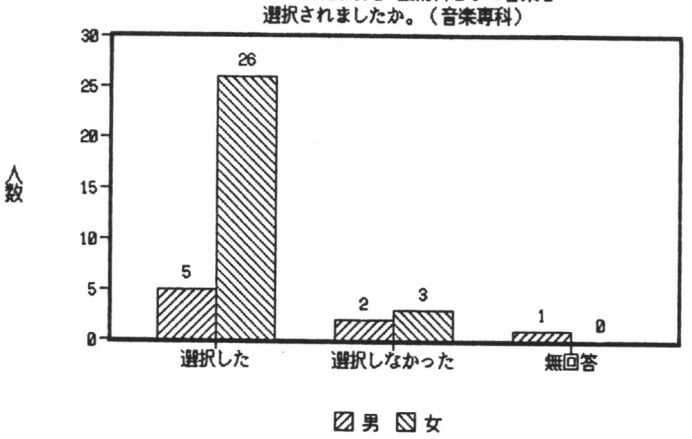


図9－4高校時代。芸術科として音楽を
選択されましたか。（音楽専科）



ここでも少数ながら記入なし、該当なし（学校指定のため実質的に必修であった、同理由のため音楽の授業そのものがなく選択できなかった、その他）が見られた。ここでは男性の学級担任の選択度合が女性の学級担任、男性の音楽専科と比して低率であることが確認できる。もちろん、これは比較の問題であり、絶対的に低率であるか否かは断定できる性格の問題ではないが、音楽教育に関わる者としては気になるところである。

Q9、大学時代の音楽との関わりについてうかがいます。

a　該当する所はすべて○印をつけて下さい。

イ　音楽科教材研究

ロ　小学校課程の音楽専門

ハ　中学校音楽科の教員免許を取得している。

ニ　大学の内外を問わず、音楽関係のサークル・クラブに所属していた。

b　前問aで「ニ」に○印を付けられた方は、そのサークルのジャンルを下の選択肢に○印を付けてお答え下さい。

1　合唱

2　オーケストラ

3　ブラス・バンド、吹奏楽

4　マンドリン・オーケストラ、ギター・クラブなど

5　ジャズ、ロック、軽音楽などのポピュラー系

6　邦楽（　　）

7　その他（　　）

集計結果は表4－1,2のとおりである。

表4－1【9】に対する学級担任の回答
大学時代の音楽との関わりについて

	男		女		不明		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
音楽科教材研究	151		325		26		502	
小学校課程の音楽専門	36		119		2		157	
中学校音楽科の教員免許を取得	6	2.3	24	4.2	1	2.6	31	4.2
大学の内外を問わず、音楽関係のクラブ・サークルに所属	37	13.9	113	22.5	7	18.4	157	21.2

＊　%の欄の数値は、該当回答者数／学級担任の回答者数

表４－２【９】に対する音楽専科の回答
大学時代の音楽との関わりについて

	男		女		不明		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
音楽科教材研究	3		19				22	
小学校課程の音楽専門	3		11				14	
中学校音楽科の教員免許を取得	4	50.0	12	41.4			16	43.2
大学の内外を問わず、音楽関係のクラブ・サークルに所属	5	62.5	15	51.7			20	54.1

＊ %の欄の数値は、該当回答者数／音楽専科の回答者数

aのイ、ロについては質問内容が良く理解できなかったようで、かなりの記入なしが見られた。これは「音楽科教材研究」、「小学校課程の音楽専門」が大学により時期により異なった名称で行われている場合があることや、教育学部出身ではない教員の多くは大学時代にこれらの単位を習得してはいない可能性があること、教材研究と音楽専門が区別できなかったため、等の理由が推察できる。

中学校音楽科の教員免許状取得状況は音楽専科の場合は学級担任と比してさすがにかなり高率であると言えよう。また、音楽関係のクラブ・サークル等への参加状況でも音楽専科教員の比率はかなり高い。

今回はQ9－bの集計・考察ともに割愛した。

Q10、幼稚園の頃から大学入学時までの間に、学校教育以外の音楽教育（音楽教室、個人レッスンなど）を受けられたことがありますか。

イ　ある（約　　年間。音楽教室、個人レッスン、その他）

ロ　ない

集計結果は図10－1,2,3,4のとおりである。

図１０－１学校教育以外で音楽教育を受けましたか。（学級担任）

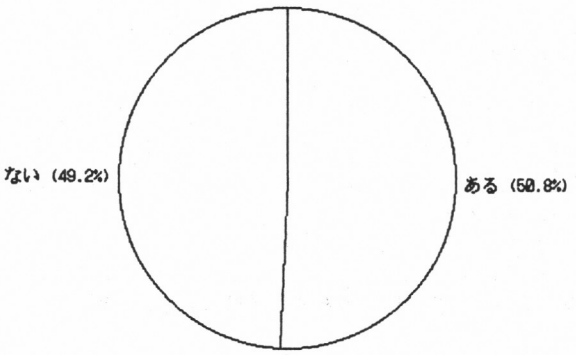


図10－2学校教育以外で音楽教育を受けましたか。（学級担任）

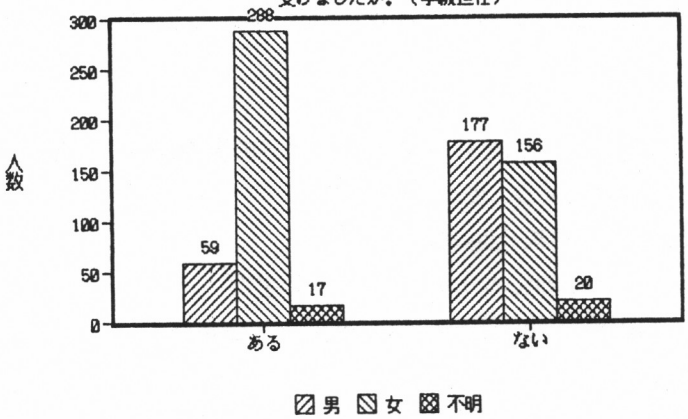


図10－3学校教育以外で音楽教育を受けましたか。（音楽専科）

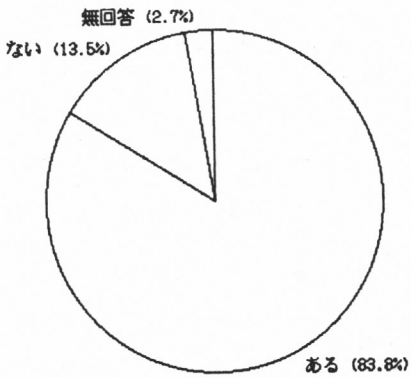
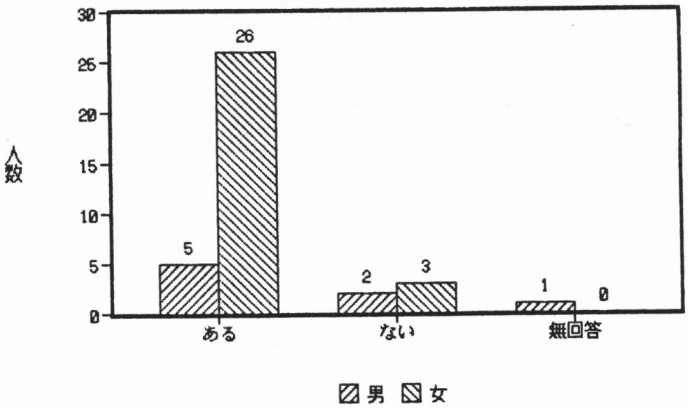


図10－4学校教育以外で音楽教育を受けましたか。（音楽専科）



ここでも若干の記入なしが見られた。傾向としては前問Q9－aの「ハ・ニ」の集計結果とほぼ同様である。音楽専科はともかくとして、学級担任の数値は同年代全体の「学校教育以外の音楽教育を受けた」比率と比較すると割合に高いのではないかと思われる。正確なデータが入手でき次第検討してみたい。

Q11、大学卒業時（またはそれ以前）のピアノの演奏能力についてうかがいます。

イ　バイエル教則本終了程度、またはそれ以前

ロ　ブルグミューラー25練習曲程度

ハ　チェルニー30番練習曲、ソナチネ・アルバム程度

ニ　チェルニー40番練習曲、ソナタ・アルバム、二、三声のインベンション（J.S.バッハ）程度

ホ　それ以上（　　）

集計結果は表5－1,2のとおりである。

表5－1【11】に対する学級担任の回答
大学卒業時（またはそれ以前）のピアノの演奏能力について

	男		女		不明		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
バイエル教則本終了程度、またはそれ以前	206	90.7	220	50.8	23	63.9	449	64.5
ブルグミューラー25練習曲程度	6	2.6	62	14.3	2	5.6	70	10.1
チェルニー30番練習曲、ソナチネ・アルバム程度	12	5.3	87	20.1	5	13.9	104	14.9
チェルニー40番練習曲、ソナタ・アルバム二・三声インベンション（j.s.バッハ）程度	2	0.9	51	11.8	6	16.7	59	8.5
それ以上	1	0.4	13	3.0			14	2.0
無回答								
合　計	227	100	433	100	36	100	696	100

表５－２【１１】に対する音楽専科の回答
大学卒業時（またはそれ以前）のピアノの演奏能力について

	男		女		不明		全体	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
バイエル教則本終了程度、またはそれ以前	3	37.5	4	13.8			7	18.9
ブルグミューラー２５練習曲程度			2	6.9			2	5.4
チェルニー３０番練習曲、ソナチネ・アルバム程度	4	50	6	20.7			10	27.0
チェルニー４０番練習曲、ソナタ・アルバム二・三声インベンション（j.s.バッハ）程度			10	34.5			10	27.0
それ以上			7	24.1			7	18.9
無回答	1	12.5					1	2.7
合　　計	8	100	29	100			37	100

ここでは約６％の記入なしがあった。学級担任全体の約63％、男性に限ると約91％、音楽専科でも全体の約19％がバイエル程度、ブルグミューラー程度まで含めると各々約75％、93％、24％のピアノの演奏能力、というのは少なからず気になる数値である。

Q12では音楽の様々なジャンルに対しての個人的な好悪を、Q13では展覧会、美術館、野外レクリエーション、運動クラブ、コンサート等への関心度を、参加状況や入場回数等で判断しようとの意図であったが、今回は集計・考察ともに割愛した。

Q14、何らかの形で音楽を趣味にされていますか。

イ　している。　種目（　　）

ロ　していない。

集計結果は図11－1,2,3,4のとおりである。

図１１－１何らかの形で音楽を趣味にされていますか。（学級担任）

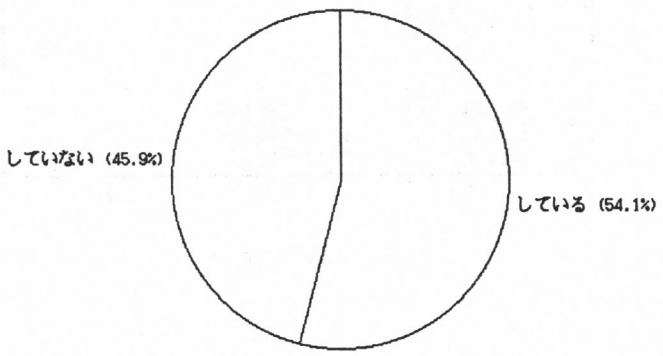


図１１－２何らかの形で音楽を趣味にされていますか。（学級担任）

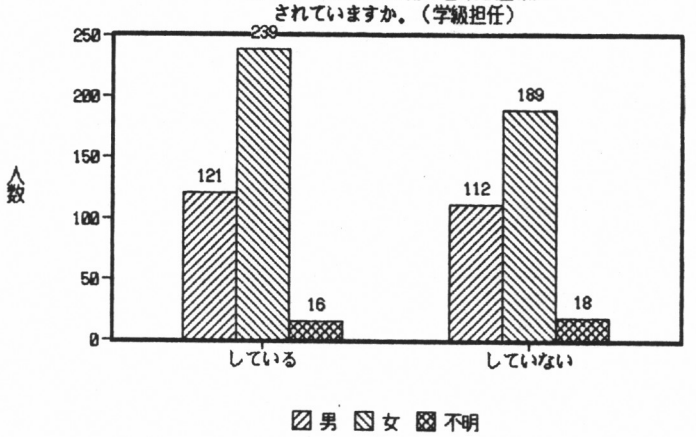


図１１－３何らかの形で音楽を趣味にされていますか。（音楽専科）

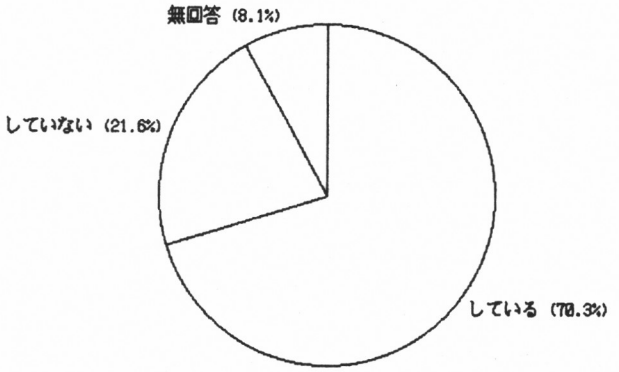
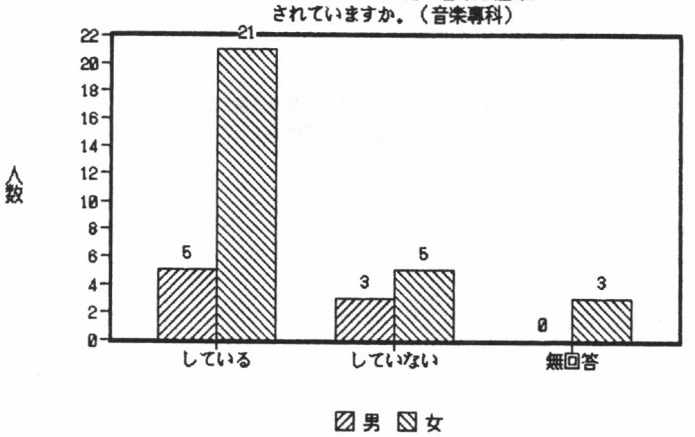


図１１－４何らかの形で音楽を趣味にされていますか。（音楽専科）



一口に「音楽を趣味にしている」と言ってもその様相、程度とも極めて多様であり、何をもってその規準とするのかは本人の意識に任せた形になっている。こちらで一定のガイド・ラインを設定したとすればこの数値にも多少の変化が見られるかもしれない。ここでは「回答者本人が自分は音楽を趣味にしていると思っている」教員がこの質問に対する回答者全体の半数以上であるということを指摘するにとどめておきたい。

尚、Q15は自由記述で「小学校音楽科の授業をするにあたり、どのような課題・悩みを」持っているかを尋ねているが、今回は集計・考察ともに割愛した。しかし、極く大まかな所は後述するつもりである。

以上、今回集計した各項目について、その結果を掲げ数値をもとに簡単な分析を行ってきた。次に、いくつかの項目に共通して見られる傾向や示唆的な特徴に着目した上で、さらに幾分詳細に論述していきたい。扱う主なテーマは次のようなものである。

① 教員の音楽の授業への関わり方の現状

② 音楽の授業の教科としての位置付け

③ 音楽の授業の望ましい担当者像

④ 音楽経験と音楽の能力・音楽への関心との関連性

これらは相互に深く関わっており、必ずしも厳密に区分して論じられるものではない。各々中心となる考察点という程の意味である。

① 教員の音楽の授業への関わり方の現状

この視点は、今回の基礎調査の大きな目的、いわば目玉であり、すべての調査項目がこれに関連付けて考えることすら可能であると言えよう。しかし、特に深く関わるのはQ2、3、4、間接的にはQ5、6、11と考えられる。前者は実際の授業を通しての、後者はそれを支えるあるいは背景を成すものと考えられるが、当然この二群も密接に関連している。しかし、Q5、6は次項②で論じていきたい「音楽の授業の教科としての位置付け」そのものであるので、ここでは関連性を指摘するにとどめたい。

まず、回答数の約9割が学級担任であったのは小学校の教育体制から見て当然の事であろう。また、「音楽の授業の教育内容検討のため」とならば、音楽専科が積極的に回答を寄せるのも当然である。ここではむしろ少数であるにしても、管理職、音楽以外の教科の専科教員、特殊学級・養護学級担当の教員が回答を寄せたことが資料的には貴重である。これらのデータは今回は集計していないが、立場が違う教員の見方として将来、集計・考察して行きたい。一方、男女別の回答数（図1参照）を見てもわかるように男性教員の回答数がかなり少ない。特に40代、50代以上の回答数は「極めて」と言いたいほどにである。これは、この年代層のかなり多くが管理職等となっているため授業現場から離れているという理由で調査用紙の配布対象とは考えられていなかったのではないか、と思われる。また、40代の教員数自体が少ないことも確かである（表1参照）。しかし、20代・30代の学級担任の回答数の男女比が年齢構成の男女比とあまり大きく隔たっていないとい

うこと等を考え合わせて、かつ少しばかりうがった見方をするならば、「音楽」と聴いただけで「自分には関係ない」という気持ちで調査そのものに関心を示してくれなかったのではないかとも考えられる。音楽教育に関わる者としては前者の理由であって欲しい。男性教員の約半数がQ2に対して「ニ今年度は音楽の授業を担当していない」という回答を寄せている。これはQ3に対する回答でその約8割が「イ専科の先生にお願いできるので」と答えていることにより一応うなずけるが、女性の学級担任で「ロ自分のクラスと他のクラス」との回答を寄せた所へもかなり入っているようにも思われる。

これら、特にQ2の数値のみを見て「男性の教員は総じて音楽の授業を担当したがらない」という結論を短絡的に導き出すことは軽率であり、危険でさえあると言わねばならない。しかし、Q3とQ4－cでの「ロいやいやながら・仕方なく」という回答数に、Q4－aでの「ロ音楽の授業ができないから」の回答数を合計したものが、男女各々の学級担任に占める比率をとってみると、男性で約33％（28＋28＋4／243）であり、女性で約10％（35＋10＋2／461）となることや、ピアノの演奏能力のかなりはっきりした差（Q11の集計結果、表5－1参照）などを見ると、先程のような結論が言われかねない素地は残念ながら存在しているようであるし、そう言われてもどうもあまり強くは反論できない集計結果になっている。これは同時に「芸術・芸能・文芸等に対しては、一般に女性の方が男性よりも関心・興味の度合や、実践率が高く、総じての平均水準も優っている」という一般論を数値的にある程度裏付ける結果となった。

それにしても、男性の学級担任の約 1／3が「いやいやながら・仕方なく」という気持ちを抱きながらか、「できないから」という理由で音楽の授業と関わっていないという現実を音楽教育に関わる者はいったいどう受け止めたらよいのだろうか。このような意識で音楽を教えられている子供達に好ましい影響があろうとは思われないし、授業をやらなければならない本人にとっても決してよいことではない。

また、今年度は音楽の授業を担当しておらず、過年度には担当した経験のある学級担任の担当した時の感想を、今年度担当している教員の感想と比較してみると僅かながらではあるが「ロいやいやながら・仕方なく」の比率が高くなっていることはすでに指摘したが（Q4－cの集計結果とその考察、図3－1,2,3,図6－1,2,3参照）、これは「担当してはみたが、どうもうまくいかない」ということを実感したからなのであろうか。このことについてできれば詳細な理由・感想を調査してみたい。

さらに、Q3、Q4－cでの「ハ特に何とも思わない、思わなかった」との回答をどう見るかということも一つのキイ・ポイントであろう。この回答はいわば中立的であり、肯定的にも、否定的にも、どちらにも属さないと判断することも、それぞれに根拠のあることと言えるし、また可能だろう。この場合、逐一理由の集計を行ってそのいずれであるかが客観的にある程度判断できれば、各々の比率や絶対数による細かな考察もある程度可能かもしれないが、ここの理由への記入なしがかなりの数に上るため、軽々な判断は差し控えたい。しかし、すべての教科について言えることであるが、授業者本人が「興味が持てない」、「楽しくない」などのマイナス・イメージの強い科目を義務感のみで教えたにしても限界があるのではないだろうか。この「特に何とも思わない（思わな

かった)」という表現は、「義務だから好き、嫌いなどと言ってはいけない」というように解釈されたようだが、これをプラス・イメージにとって「喜んで・楽しんで」と合計して約9割が肯定的にやっていると判断するか、マイナス・イメージにとって「いやいやながら・仕方なく」と合計して約4割が否定的と判断するか、これは今後の内容検討を大きく左右する要因となろう。

Q11の集計結果（表5－1参照）で、「バイエル程度のピアノの演奏能力」との回答は、学級担任の男性で約9割、女性で約5割であったが、これでは高度な教材をこなすのはかなりの苦労であろうと察せられる。小学校音楽の教科書には一部児童でも弾けるような簡単な伴奏が載っているが大部分の伴奏譜は教師用指導書に掲載されており、しかもいろいろな事情を配慮して二、三種類の伴奏譜を採っている場合も多い。しかし、最も音楽的に充実しているものを弾きこなそうと思えば、一般的にはやはりある程度の技術的基礎はどうしても必要となってくるであろう。確かに、近年のテクノロジーの飛躍的な進歩により便利な音楽教育機器やオーディオ製品が出現してきている。しかし、それらがすべての学校に完備されているという状況からは程遠いだろうし、それらの機器とて限界もあり取扱いに習熟しなければ大して役に立ってもくれないだろう。そして何よりも機械は機械、人間のように自らが判断しその場その場に応じた細かな対応をしたり、互いのコミュニケーションをすること等は出来るはずもない。他教科の例を持ち出すまでもなく、音楽でも「生身の肉体を持ったその人自身がいったい何をすることができるのか」が問題であり、「児童・生徒・学生達にその子・その人自身の生身の肉体によって何かができるようになるように指導していくこと」が重要なのである。特に幼児には言葉によって指示してもなかなかうまくは行かない。これはもちろん受け取る側にそれだけの言葉に対しての蓄積がないという発達段階的理由によることが多いだろう。しかし、「先生がやることを真似してごらん」というのはたいていの場合かなり効果がある。この場合教える側に真似るべきモデルを提示するだけの能力はどうしても必要であり、それなくしてはどうにもならない。

この点ではQ15に対しての回答で発声法、歌唱法、それらの指導法上の悩みを訴えたものが多数見られたことは見逃してはならないだろう。また、確かに楽器の演奏能力はピアノだけに限られるものではない。しかし、ピアノなしであるいは全くピアノに頼らずに音楽の授業をやっていくためには、教師の側にかなり優れたアイディアとかなり先までの授業の見通し、そしてそれを子供たち（生徒たち、学生達たち）に納得させ、引っ張って行くだけの力量（専門性、指導力）が要求される訳で、これも並大抵のことではなかろう。

今までは男性教員の音楽力の低さをずっと考察の対象としてきたが、①の最後にあたりそれが必ずしも本人の才能の欠如を意味するものではなく、本人のみの責任に帰せられるものではなく、社会環境や教育をめぐる状況さらには社会一般の音楽に対しての見方等に起因している部分も大きいに違いない、と付け加えておきたい。回答者の大部分を占めている20代、30代の人たちが育ったのは高度成長経済のまっ只中であり音楽産業も確かに急成長したが、その市場対象は専ら低年齢の女子であり多くの予算を計上出来る学校教育関係のものであった。それ以外の所での音楽市場がクローズ・アップされてきたのはここ十数年程である。

② 音楽の授業の教科としての位置付け

ここではQ5、Q6に対しての回答の集計結果の分析・考察が主なものである。まず、Q5の集計結果であるが（表2－1,2,図7－1,2,3,4,5,6参照)、これで見る限り殆どの教員が「音楽は教科として重要である」という認識を持っていると考えてよい。肯定的な「非常に重要」、「重要」との回答数を合計した比率は90％を上回っているし、否定的な「重要でない」の回答数は極めて少なかった。もちろん、ここに絶対的な規準や尺度は存在しないが、これだけの教員が実感としてあるいは認識として「音楽は重要な教科である」と位置付けてくれたことは重要だろう。ここでは、男女差はあまり大きく見られなかったが、少し細かく数値をながめていくといくつか興味ある点が見出される。

まず、学級担任と音楽専科と比較してみると、後者の方がすべての学年で前者を上回った数値を示しているが、これは極めて当然の結果であろう。次に低学年では「非常に重要」と位置付けているのは学級担任の約 2／3、音楽専科の約3／4であるが、これが中学年になると急激に減って前者では約1／3、後者では 2／5強となる。高学年では中学年と比較すると少し減少する程度であまり大きな差は見られない。この数値の違いから、かなりの数の教員が音楽の授業の教科としての位置付けに関しては、低学年と中学年の間で大きな節目があるという認識を持っているようである。

また、学級担任の中での男女差を見ていくと、中・高学年では男性の方が女性よりも重要度という点に関しては認識が高いという結果を示している。これは前項①を思い起こすと興味深い。男性教員は「自分の音楽的能力と音楽の教科としての重要度を客観視して分けて評価する位の能力は持っている」と言いたいかのようである。

Q6に対しての回答の集計結果は前掲のとおりである（表3－1,2参照)。この数値からは前述のように、学級担任はどちらかと言えば「学級経営のための重要な教科の一つ」として位置付けていると言えよう。これはQ7に対して「ハ児童の発達段階により違ってくる」と回答したものの多くが、具体的に「低学年は学級経営上、担任が望ましい」という提言とその理由を記入していることからも裏付けられよう。

このようにして、Q5とQ6の集計結果をつき合わせてみると、学級担任、特に低学年を担当する教員にとっては「音楽は、音楽そのものより音楽によっての学級経営が重要」なのであるという実状が浮かび上がってくる。これは考えようによっては極めて当然であり特別驚くには当たらないかもしれない。幼い子供たちにとっては音楽は決して独立したものではなく、自分の身体の動きや遊ぶ行為と密着しているものだからであり、極く一部の天才少年、天才少女を除いて自立的価値を持ち得ないだろうと想像されるからである。もちろん、このように「低学年の学級担任は、音楽そのものよりも音楽によっての学級経営の方に重要度を認めている」と断定するためにはもう少し突っ込んだ数値的根拠が必要であろう。すなわち、低学年の学級担任の殆どがQ5で「低学年の音楽は非常に重要」と考えており、Q6で「明るく楽しい学級作り」を音楽の授業の最重要点と把え、Q7で「児童の発達段階（学年）により担当するべき人は違ってくる」とし、その理由に「低学年では学級経営上、担任教員が音楽の授業を担当するのが望ましい、あるいは当然そうであるべき」

と記入している必要がある。この点は時間をかけてたんねんに調査項目を関連させての再集計を行えば明確にすることができると思う。

Q6においては「ト幅広く音楽に触れさせ、豊かな音楽的感性を育成すること」、「チすべての音楽活動を通して音楽を愛好する心を育てること」にも「ロ音楽をすることによる明るく楽しい学級作り」とあまり違わないだけの回答数がある。これによって音楽そのものの重要さにも目が向いていると推察できる。この「ト・チ」二つの選択肢は音楽の心情面を重要視する立場から発せられた異なった表現であるので、もしこの二つの選択肢を整理してまとめた上でのQ6であったら「ロ」よりも多くの回答数が集まったということも予想される。

しかし、「イ発声法・楽器の演奏などの技術習得」や「ハ音楽についての知識を広めさせ、理解を深める」という側面については小学校段階ではあまり重要視されていないようである。「ニ歌や楽器演奏など、上達しようと頑張る気持の育成」にしても後半の「頑張る気持の育成」の方に重きを置いて評価され、その結果中程の順位に浮上してきたように思えるし、「ホ自分で考える活動を多く取り入れること」も多くの支持を得ているとは言い難いこと等から見て、これらが第二義的な位置付けしか与えられていないという集計結果は、音楽の実技的側面は音楽の授業とは直接関わりのない場で行われることの方が今後ますます強くなっていき、音楽は教科としてよりも学級経営・教室運営のための時間あるいは機会・場として重要な役割を果たすという傾向になっていくのかもしれない。

以上、主として学級担任の集計結果を中心に考察してきたが、音楽専科の集計結果の数値では、学級経営上の側面よりは心情面を重要視する立場に関心が強いと言うもののイ・ハ・ニ・ホの集計結果は、やはりこれらが第二義的位置付けしか与えられていないことを示している。これらは、小学校段階での音楽教育がいったいこれからどうあるべきかを考えていく上で極めて示唆的であり、これらを踏まえた上で教育大学、教育学部での小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムの検討と開発を進めて行きたい。もちろん、これらの回答結果が出てくる背景についての考察も当然行われなければならないが、今これらの数値をながめている限りにおいては推察の域をでるものではなく、この調査の項目を新たにいくつか関連付けて再集計を行うなり、さらに別の調査を行い、それらのデータをもとに研究を積み重ねていく必要がある。

③　音楽の授業の望ましい担当者像

ここではQ7の集計結果とその考察が中心になる。集計結果は前掲のとおり（図8－1,2,3,4参照）であり、これについての概観的な考察はすでに行ったが、ここでは一歩進めてこの理由について考えるとともに、望ましい音楽教育について探っていきたい。

Q7に対しては学級担任の殆ど全員が何らかの回答を寄せている。これは他のいくつかの調査項目に対しての記入なしが相当数あったことを考えると、この問題に対してはかなり関心が高いか、常日頃から何かを感じているので、この機会に自分の考えを書いておきたい、と思った教員が多かったのだろうと推察される。同時にこれがかなり大きな問題であることも示している、と言えるだろう。Q7への理由に目を通して得られた最大公約数的結論として次のようなものを提示すること

が可能である。すなわち「小学校の授業は原則として学級担任が行うのが望ましいが、すべての教員がすべての教科に対して均質で充分な力量を持っている訳ではなく、教科によって多少の得手不得手があるのは人間として当然でもあろう。それ故、音楽の授業は学級経営に重きを置く低学年では教材もある程度易しいといえるので学級担任が、教科の内容そのものがより重要になってくると思われる中・高学年では教材もそれなりに高度になっていると思われるので専科をはじめとする音楽が得意な教員に担当してもらった方がよいのではないか」というものである。これはおそらく現在の小学校の状況からみて予想された結論と言ってよいだろうし、ある程度現実肯定的とも言い得るだろう。これとほぼ同じ内容の調査も行われており、データとしては少し以前のものであるが1977年に岩手県で行われた調査でもほぼ同様な傾向を示している。[3]

これらは「教師が持っているもの以上を児童・生徒に教えることは出来ない」、「指導者が身に付けているもの以上を伝えることは出来ない」という教育一般について言われている立場にたてば幅広く深い音楽的知識・教養・技能を有し、理解力・指導力に優れた教員が指導にあたった方がよいであろうことは容易に察せられるものの、裏を返せば「小学生にも力量のなさが分かってしまう程度の音楽力しか持つことが出来ないまま教壇に立たざるを得ない教員も残念ながらいる」という現実を物語っている。確かに①の最後に述べたような社会的状況や風潮もあるには違いないし、改訂前の教員免許法によれば教科専門の音楽を履修しなくても小学校の教員免許状を取得することは可能である。しかし、学校現場、特に何から何まですべて限られた人員の中でやりくりせねばならない小規模校では「学級担任がすべての教科をやるのは当然」という原則は根強く生きていると言えるだろうし、教育行政はこの原則論で運営されている。

「音楽は特殊技能を必要とする教科であるから」専科や得意な教員にやってもらいたいという意見もあった。しかし、どんな教科でも高度な段階まで達すればそれはやはり特殊技術と呼んでよいのではないだろうか。音楽だけが特別視される理由を持っているわけではない。確かに実技教科の宿命として音楽も特別扱いされることは多い。しかし、これとても人間のやっていることであり、その気にさえなってやれば、なにがしかは出来るようになるものだということを先程のような意見を持っている人々に認識してもらいたいが、それにはもうしばらく時間がかかりそうである。今のわれわれはせめて今在学している学生たちに「やれば、なにがしかは出来るようになるものだ」という実感を持って現場に出て行って欲しいと思う。

学級担任のかなり多くが中・高学年の音楽科教材は難しい、と感じていることはQ11の集計結果（表5－1参照）一つ見てもある程度わかるが、ここに現れたピアノの演奏能力に代表される音楽の力やQ5の重要度の認識と絡んで「誰が音楽の授業を担当すべきか、望ましいか」という問題にどのような影響を与えているのか非常に興味があるが、これについても断定的なことはいくつかの項目を関連させてみての再集計の結果を見た上でないと言えないだろう。しかし、ピアノに代表される「音楽的にある程度以上能力を持っている」であろう教員はおそらく「学級担任が音楽の授業を担当した方がよい」と考えている比率が高く、逆に音楽的能力が乏しいまたは自信の持てない教員は「専科をはじめ得意な人にやって欲しい」と思っている比率が高いのではないだろうか。時間をかけて集計を行ってみたい。

尚、絶対数が学級担任に比して極めて少ないので、同等の比重で論じることは出来ないが、音楽専科が必ずしも「音楽は音楽専科が担当すべき」、「音楽専科が担当するのが望ましい」とは考えていないこと、「児童の発達段階に従って担当をかえて行けば問題が解決する」というような発想法でこの問題を把えていないようであることを付け加えておきたい。また、「音楽専科が音楽の授業を担当すべき」と考えている学級担任の比率が、男性は女性の倍近くに達しているということも見逃さずにおきたい。

③の最後にQ7の「ホその他」の意見の中に、「学校の事情は各々異なっているのだから、『誰が担当すべき』という発想で答えられる問題ではないと思う。その学校にとって最も望ましい担当の仕方を作って行くという発想がなぜとれないのか」というものがあったことを記しておきたい。

④　音楽経験と音楽の能力・音楽への関心との関連性

ここでは音楽の授業から離れて、教員の音楽全般との関わり合いを少し論じてみたい。ここで関連してくる項目はQ8,9,10,11と14、それに今回は集計を行なっていないQ12,13である。

ここでは当然のことながら、音楽に対しての関心は学級担任に比して音楽専科の方が高いという数値がすべての集計結果に出てきている。また、学級担任の中では女性の方が男性に比して一般に高い数値を示している。

Q8の「高校時代に音楽を選択されましたか」との質問に対しては、学級担任の男性では約1／3強、女性の約6割が「選択した」との回答を寄せている（図9－1,2参照）。単位履修の仕方は学校により極めて多様なので、この数値がいったいどの程度のものなのか、すなわち「在学中の1年間だけ履修、他学年では他の芸術科目を選択・履修したか芸術科を履修しなかった」という必要最低限で済ませてしまったものから、「3年間全部音楽をとった」というものまでのどの辺に位置するのか判別し難いが、男性のうち約6割強が豊かな感受性を持つ高校時代に芸術科としての音楽に触れていないのはやはり気にかかる。もちろん、音楽関係のクラブ等に所属していたと言う場合や、学校以外で軽音楽等に接していたことも考えられるので、「全く音楽には接していない、音楽に対しては全く無関心であった」という訳ではないだろう。これに対して音楽専科では男性の6割強、女性の9割弱が高校時代に芸術科としての音楽を履修している（図9－3,4）。

Q9の前半二つの質問については前述のように設問の不備等もあり、今回の考察対象からは除いた。現在の教員免許法では小学校教員養成課程の音楽科教材研究（またはこれと同じ内容を持つ学科目）は必修単位であるし、本学部（山口大学教育学部）での小学校課程の音楽専門（初等科音楽）の履修状況から見て、このぐらいの数にとどまるものではなかろうと思われる。

後半二つについてはおよその実状を知ることができよう（表4－1,2参照）。音楽専科の比率が全般に低いようにも思われるが、これは他教科または主任等と兼務している教員を含んでいるからであり、それらを除いて新たに集計し直すと比率はかなり上昇するものと考えられる。

Q10では学校以外の場での音楽教育を受けた経験があるかどうかを尋ねた（図10－1,2,3,4参照）。Q10に回答した学級担任 717人のうち5割強が何らかの形で受けた経験があると答えているのは当時の一般状況と比してかなりの高率と言わねばならないだろう。このことは何らかの形で

学校以外の音楽教育を受けた経験のある人たちが多く小学校の教員になっているということであり、そういう幼少期の教育環境が進路決定に何らかの影響を及ぼしているのではないかということも推察され得るが、度々述べてきたように、的確な判断を行うための材料としてはこの資料だけでは不充分と思われるので、ここでも可能性を指摘するにとどめておきたい。音楽専科はさすがに高率であるが、先程と同じ理由でさらに上昇する可能性もある。

Q11では「大学卒業時（またはそれ以前）」としてピアノの演奏能力を尋ねたが、これはもちろんピアノの演奏能力に代表される音楽的技能・力量がどの程度のものなのかが、少しでも客観的な数値として現れてくれることを期待したからである（表5－1,2参照）。再々指摘してきたように、ピアノの演奏能力は全体的にはあまり高い水準にあるとは言い難い。こうしてみると、幼少期の学校以外での音楽教育の成果は目に見えるような具体的な形では現れていないという結論にもなりかねない。これはそれらの「お稽古通い」の大部分が自発的なものではなく、母親に手を引かれての半ばイヤイヤながらのものでありかつまた現在ほどには教材や教育法の開発・整備が行われていなかったためではないかと推察される。

しかし、この問題が現状のままでよいということにはならないだろう。やはりピアノは弾けないよりは弾けた方がよいに決まっているし、授業をやっていく上で極めて有効な能力であることも確かだろう。今後のピアノの演奏能力向上を期待したい。

今回は集計・考察ともに見送ったが、Q12では「音楽のジャンルの上での好悪」を尋ねた。これは特に「聴取」あるいは「享受」と断わった訳ではなかったが、回答を寄せた全員がそのように受け取ったようであり「音楽を聴いて楽しむこと」そのものについては殆どが肯定的であった。

Q14では趣味としての音楽について尋ねたが、ここでも「何をもって趣味とするのか」は回答者本人の意識と判断に任されているため、その内容はともかく、精神生活に占める程度まで立ち入って考察することは、データの性格上困難と思われるので、集計結果（図11－1,2,3,4参照）に簡単にコメントを付すこと、どのような種目が見られたか等を紹介するにとどめたい。その上で集計数値を見ると、学級担任の約半数が「自分は音楽を趣味にしているあるいは趣味の一つに加えている」と考えていることがわかる。その範囲も、カラオケ、ママさんコーラスへの参加、ラジオ・テレビ・ステレオ・レコード等で音楽を聴く、ピアノ・電子オルガンをはじめとする楽器の演奏、ブラス・バンド、オーケストラ、ジャズ・バンド等への参加、邦楽を習いに行く、と非常に幅広かった。また、年代差、男女差も著しいものではなかった。

「趣味にしていない」の回答者の中には「家庭の事情、職場の仕事等で忙しすぎてとても趣味にするほどの時間的余裕がとれない」という場合もかなり含まれているのではないか。「趣味にしていない」から直ちに関心が無いと断じてしまうのは少々結論を急ぎすぎているように思われるが、これも再調査を行って、新たなかつ詳細なデータが出てこない限りは判断できない。

音楽専科の方が学級担任より高い数値を示しているのはここでも同様である。音楽専科の中には「音楽は自分にとっては仕事であり、心情的に趣味とは思っていない」という人も含まれているやもしれず、これだけで正確な判断が難しいのは前と同じである。音楽専科では邦楽を趣味にしている回答者はいなかったのが印象的であった。

ここで興味深かったことは、音楽専科の男性の集計結果で時間的な順序で列べると順にQ10でイ、Q8でイ、Q9でニ、Q14でイ、つまり一貫じて音楽に対して興味・関心を持ち、肯定的姿勢が強いと考えてよい回答者の数値が全く同一であることである。もし、この5人がすべての回答で同一であるならば、幼少期での音楽との関わり合い方がその後の音楽的関心を大きく左右するという一つの根拠になるかもしれない。もちろん、絶対数が極めて少ないこのような場合は偶然そうなっただけということも考えられるが、音楽専科の女性の場合や学級担任の中にこれと同じ回答パターンを示しているケースが相当数あれば数値的に説得力を持ち得ると言えよう。再集計を行って確かめてみる価値はありそうである。

Q15の内容について極く一部は前に述べた。それらの「発声法、歌唱法とその指導上の悩み」の他に、「やる気を全く見せない子供への対処の仕方」、「騒ぐ子供をどう扱うか」、「楽器などの個別指導が時間的にとりにくい」、「音楽室、楽器などの施設・設備がひどすぎる」、「学校以外の音楽教育を受けてきた子供とそうでない子供との間に差がありすぎて一斉指導が極めて難しい」、「伴奏がうまく弾けず、ピアノの練習をしたいが時間がとれない」、「音楽に理解を示さない教員が多すぎる」その他さまざまに現場での苦労を偲ばせるものであった。

Ⅳ章の最後に印象に残った感想を一つ挙げておこう。

「専科の先生のおかげで、心安らかな日々を送っております」(30才代、男性)

Ⅴ おわりに

本研究では、山口県内の小学校の教員を対象にした調査の結果をもとに、小学校における音楽教育の実態と音楽教育に対する教員の意識について考察した。先ず、前段で質問項目ごとに集計結果の数値をながめて若干の考察を加えた。次に、後段では、①教員の音楽の授業への関わり方の現状、②音楽の授業の教科としての位置付け、③音楽の授業の望ましい担当者像、④音楽経験と音楽の能力・音楽への関心との関連性、の各テーマについて幾分詳細に考察を行った。

これらの結果から、小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムの検討と開発を進めていく上で、次の二点は考慮されるべきであると考えた。

○ 小学校の教員は「音楽の授業の重要さ」について認めてはいるが、音楽の授業では、音楽あるいは教科内容そのものの指導というより、音楽の授業の学級経営上での役割を強く意識している傾向があること。

○ 小学校の低学年では、前述のような授業の傾向から学級担任が音楽の授業を担当するのが望ましいが、かなり高度な音楽的技能を要する中学年・高学年では音楽専科や音楽の得意な教員が担当するのが望ましい、と考えていること。

今回の分析考察は主として教員の男女別あるいは学級担任と音楽専科の視点で行われたが、次稿では、これらのことがらについて更に教員の年齢別あるいは関連した数項目をつき合わせての分析考察、

また今回分析考察し残している内容、すなわち1）質問項目における自由記述の部分、2）二つの質問項目（教員の各ジャンルの音楽に対する好悪、芸術文化・体育等の行事・催し物への関わり）についても分析考察を試みるつもりである。

本稿は、本研究の最終的な目的である、「小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムの検討と開発」への一つの手続きとして行った調査の報告の一端であるが、今回の調査研究を通じて最も有意義であったことは、調査票の作成段階から分析考察までわれわれ7人の者がいっしょに仕事をしたことである。

謝　　辞

今回の調査を実施するに当たって、全面的にご協力いただいた山口県小学校教育研究会音楽部会（会長原　祥文）及び調査対象になっていただいた先生方に対して厚くお礼申し上げます。

注及び引用・参考文献

1）　千成俊夫,(1981)；「音楽科教員に求められる資質」季刊音楽教育研究 29 pp.80－87

2）　平成元年 3月22日発行の官報（文部省令第 3号）による

3）　吉田久五郎,(1979)；「第Ⅳ章　音楽教育と教師の研修」教育学講座　第13巻　造形と音楽の教育　学習研究社 pp.296－300

4）　広瀬鐵雄,(1977)；「西ドイツの学校音楽に関する諸問題」音楽教育学　第7号 pp.36－47

5）　三好清美,(1989)；「小学校音楽の授業のあり方－共同体としてのクラスを生かして－」昭和63年度山口大学教育学部幼稚園課程卒業論文

教育学部音楽科における教育内容検討のための基礎調査

Ｑ１、先生ご自身についてうかがいます。
（男・女）　（２０代・３０代・４０代・５０代以上）
今年度の所属についてうかがいます。
1　学級担任（　　）学年
2　専科、教科（　　）
音楽専科の先生方にうかがいます。
出身大学は次のどれでしょうか。
ｲ　教育学部・教育大学系　　ﾛ　音楽学部・音楽大学系
ﾊ　音楽大学などの教育学科　　ﾆ　その他（　　）

小学校における授業についてうかがいます。

Ｑ２、現在、音楽の授業を担当しておられますか。
ｲ　自分のクラスを担当している。
ﾛ　自分のクラスと他のクラスを担当している。
ﾊ　専科教員として担当している。
ﾆ　担当していない。
Ｑ３、前問Ｑ２で、「ｲ（自分のクラス）」、「ﾛ（自分のクラスと他のクラス）」と答えられた先生方にうかがいます。音楽の授業を担当することについてどのような感じを持たれていますか。
ｲ　喜んで（楽しんで）担当している。
ﾛ　いやいやながら（仕方なく）担当している。
ﾊ　特に何とも思わない。
ﾆ　その他（　　）
選ばれた理由について簡潔にお書き下さい。

Ｑ４、前問Ｑ２で、「ﾆ（担当していない）」と答えられた先生方にうかがいます。
a　担当していない理由をお答え下さい。
ｲ音楽専科の先生にお願いできるので。
ﾛ音楽の授業ができないから。
ﾊ他の教科（　　）の専科教員だから。
b　今年度以外についてうかがいます。
音楽の授業を担当されたことがありますか。
ｲある
ﾛない
c　前問ｂで、「ｲ（ある）」と答えられた先生方にうかがいます。音楽の授業を担当された時の感想をお聞かせ下さい。
ｲ喜んで（楽しんで）担当していた。
ﾛいやいやながら（仕方なく）担当していた。
ﾊ特に何とも思わなかった
ﾆその他
選ばれた理由について簡潔にお書き下さい。

すべての先生方にうかがいます。

Ｑ５、小学校における教科としての音楽科の重要度について、どのような感じを持たれていますか。低・中・高学年のそれぞれについてお答え下さい。

	非常に重要	重要	少しは重要	重要でない
低学年				
中学年				
高学年				

Ｑ６、小学校音楽科の授業はどのような点に重きを置くべきだとお考えになりますか。上位３位までを数字でご記入下さい。
（　　）ｲ発声法・楽器の演奏法などの技術習得。
（　　）ﾛ音楽をすることによる明るく楽しい学級作り。
（　　）ﾊ音楽についての知識を広めさせ、理解を深めさせること。
（　　）ﾆ歌・楽器演奏など、上達しようと一生懸命頑張る気持ちを育てるこ

と。
(　　)ホ こう歌いたい、こう演奏したい、と自分で考える活動を多く取り入れること。
(　　)ヘ 子供どうしの助け合い、話し合いの場面を持たせ、お互いに励まし合ったり高め合う活動を行うこと。
(　　)ト 幅広く音楽に触れさせ、豊かな音楽的感性を育てること。
(　　)チ すべての音楽活動を通して音楽を愛好する心を育てること。
(　　)リ その他(　　)

Q7、小学校音楽科の授業は誰が担当すべきだとお考えになりますか。
イ 学級担任
ロ 専科教員
ハ 児童の発達段階(学年)によって違ってくると思う。
ニ 同一学年間での担当授業をやりくりしてでも得意な先生がやるべき。
ホ その他(　　)
選ばれた理由を簡潔にお書き下さい。

先生方ご自身の音楽経験などについてうかがいます。

Q8、高校時代、音楽を選択されましたか。
イ 選択した。
ロ 選択しなかった。

Q9、大学時代の音楽との関わりについてうかがいます。
a　該当する所はすべて○印をつけて下さい。
イ 音楽科教材研究
ロ 小学校課程の音楽専門
ハ 中学校音楽科の教員免許を取得している。
ニ 大学の内外を問わず、音楽関係のクラブ・サークルに所属していた。
b　前問aで「ニ」に○印を付けられた方は、そのサークルのジャンルを下記の選択肢に○印を付けてお答え下さい。
1　合唱
2　オーケストラ
3　ブラス・バンド、吹奏楽
4　マンドリン・オーケストラ、ギター・クラブなど
5　ジャズ、ロック、軽音楽などのポピュラー系
6　邦楽(　　)
7　その他(　　)

Q10、幼稚園の頃から大学入学時までの間に、学校教育以外の音楽教育(音楽教室、個人レッスンなど)を受けられたことがありますか。
イ ある(約　　年間。音楽教室、個人レッスン、その他)
ロ ない

Q11、大学卒業時(またはそれ以前)のピアノの演奏能力についてうかがいます。
イ バイエル教則本終了程度、またはそれ以前
ロ ブルグミューラー25練習曲程度
ハ チェルニー30番練習曲、ソナチネ・アルバム程度
ニ チェルニー40番練習曲、ソナタ・アルバム、二・三声のインベンション(J.S.バッハ)程度
ホ それ以上(　　)

Q12、音楽の名ジャンルに対しての個人的な好悪をお答え下さい。

	好き	どちらともいえない	嫌い
イ クラシック			
ロ 歌謡曲・演歌			
ハ 和製ポップス(フォーク・アイドル歌謡など)			
ニ 外国産ポップス(タンゴ・シャンソンなどを含む)			
ホ 映画音楽・ﾑｰﾄﾞﾐｭｰｼﾞｯｸ			
ヘ ｼﾞｬｽﾞ・フュージョン			
ト ロック			
チ 邦楽			
リ 民族音楽			

イ～リ以外で特に好きなもの、嫌いなものがあればお書き下さい。
特に好き(　　)
特に嫌い(　　)

Ｑ１３、次のような施設、催し物などにはどの程度行かれますか。

	よく行く	たまに行く	殆ど行かない
イ 展覧会・美術館など			
ロ 野外レクリエーション・ピクニックなど			
ハ 運動クラブ・サークルなど			
ニ カルチャー・センターなどの文化的サークル			
ホ 音楽会・コンサート（ジャンルを問わず）			

注　よく行く　　ーー月に１・２回以上
　　たまに行く　ーー年に数回程度
　　殆ど行かないーー年に０ー１回以下

Ｑ１４、何らかの形で音楽を趣味にされていますか。

イしている。　種目（　　）

ロしていない。

Ｑ１５、小学校音楽科の授業をするにあたり、どのような課題・悩みをお持ちですか。自由にお書き下さい。（簡潔にお答え下さい。）

ご協力ありがとうございました。